



大勢の会員を前に、まず田村会長が挨拶

開会に先立ち、まず、先日西日本を襲った台風二十一号、そして北海道大地震で被災された方々に謹んでお悔やみとお見舞いを申しあげます。本日出席の皆様と共に早い復旧を心より祈念したいと思います。

さて、本日は、大学側よりご来賓として柳谷理事長、土屋学長をはじめ大勢の役員、先生方、そして連合駿台会の会員の皆様、ご多忙のところ六十五周年記念例会にご出席い

ました。

まず、田村駿台会長から次のような挨拶がありました。

平成三十年九月十九日、ホテルグランドパレス「ダイヤモンドルームの間」におきまして、連合駿台会創立六十五周年記念例会が開催されました。当日は理事長、学長、大学幹部などのご臨席を賜り、会員やご家族・ご友人も含め、百八十人を超える方々が出席されました。

連合駿台会 創立六十五周年記念例会を開催

連合駿台会報

No.342 平成30年11月15日発行
発行・編集 連合駿台会
発行人 広報委員長・齋藤柳光
編集人 事務局・矢嶋まゆ子
〒101-0052 千代田区神田小川町三十二
明治大学「紫紺館」内
電話 (〇三) 三二九六―四七四七
印刷 有限会社 美創

ただき誠にありがとうございました。

先ほどオープニングで流されました曲、初めての方もいらっしゃると思いますが、とても懐かしく聴かれた方もかなりいらっしゃると思います。我々の会の前身であります「茗水クラブ」三十五周年時に作られた『茗水クラブ讃歌』であります。作詞は、連合駿台会第二代会長であり、元明治大学理事長の長堀守弘氏、作曲は古賀政男先生の一弟子でマンドリン倶楽部の常任指揮者、作曲家・編曲家の甲斐靖文氏、そして伴奏と歌は明治大学が誇るマンドリン倶楽部とグリーククラブの皆様です。まさに感動、感激ものです。いかがでしょうか？

簡単に六十五周年といいますが、本日も列席の方々の中には、まだ生まれていない方も大勢いらっしゃるかと思います。それほど長い歴史と伝統のある会なのでございます。

昭和二十八(一九五三)年、経済人を中心に「茗水クラブ」が誕生し、その後昭和三十九(一九六四)年、東京オリンピックの年に日本を代表する大学づくりを目指して「明友クラブ」が結成されました。この二つのクラブを平成十四(二〇〇二)年に統合して「連合駿台会」が設立されたわけです。

「茗水クラブ」誕生当時は三十名足らずの会員数ということでしたが、八月末現在、三百七十名の方が会員となっております。今後

は、会員の親睦と大学への貢献を二本柱として、入会してよかったと感じられる、活気ある事業運営を目指してまいりたいと考えておりますので、倍旧のご支援、ご協力をお願いしたいと存じます。

最後になりましたが、本日の会場、当会河村副会長の格別のご厚意によるところ大であります。この場を借りてお礼申しあげます。

また、今日のお客様は口の肥えた方ばかりですので、料理長が腕によりをかけて、ホテルの伝統料理を皆さんにご賞味いただくというところでございます。イベントも盛りだくさん用意しておりますので、美味しい料理を召しあがりながら最後までごゆっくりご歓談いただき、創立六十五周年を祝っていただきたいと思っております。

本日は、ご列席ありがとうございました。

続いて柳谷孝理事長から「創立六十五周年、おめでとうございます。連合駿台会は各界で活躍されているリーダーが集う会であり、大学への発展に貢献いただいていることにお礼と敬意を表したい。大学ではこれから創立一四〇周年に向けて準備をスタートする。引き続きご指導、ご協力をお願いしたい」という主旨の祝辞を述べられました。

その後、連合駿台会として第四代会長を務められた山口政廣氏に、記念品が贈られます。

した。記念品は彫刻家の山田朝彦常任理事が制作されましたフクロウの彫像で、フクロウは知恵の守り神と言われますから、これからも連合駿台会を大所高所からお見守りいただければと思います。

記念エンターテイメントとしては、社会風刺コント集団「ザ・ニュースペーパー」による、現在の政治などに対する風刺を込めた楽しいコントを観賞しました。

小休止の後は、長吉泉・明治大学元理事長の乾杯で記念懇親会がスタート。ホテルグランドパレスの美味しい料理とお酒を堪能し



最後は円陣を組んで校歌を斉唱

ながら、会員同士の親睦を深めました。

そして、明治大学を経て東京藝術大学大学院卒業後にプロ歌手になったテノールの渡辺大さん、同じく明治大学を経て東京音楽大学に進んで活躍するソプラノの竹村真実さんによるオペラアリアと日本歌曲の演奏があり、会員の心を魅了いたしました。

最後、明治大学応援団による校歌や応援歌などの演舞になりますと、会員のボルテージも最高潮、明治大学の母校愛あふれる素晴らしい会となり、山田憲典副会長による中締めで、興奮冷めやらぬまま、記念例会は盛大に幕となりました。

◆新入会員ご紹介

前回までの理事会で承認され、入会された方をご紹介します。(敬称略・到着順)



佐々木 修二
昭和五十四年・経営学部卒
(株)サンゲツ・取締役常務執行役員営業本部長
東京都大田区在住



藤田 利之
平成六年・商学部卒
(株)レアジヨブ・取締役副社長
東京都目黒区在住



山端 康幸
昭和三十八年・経営学部卒
税理士法人東京シティ税理士事務所・代表税理士
東京都千代田区在住



吉田 武
昭和四十八年・政経学部卒
森トラスト(株)
取締役副社長
埼玉県川口市在住



高見 克司
平成元年・経営学部卒
新日本建設(株)
代表取締役社長
千葉県千葉市在住



美濃 和男
平成元年・経営学部卒
(株)エイジア
代表取締役社長
東京都目黒区在住

◆明大ニュース

●第二十一回ホームカミングデーを開催

年に一度、校友やその家族を母校に迎える「第二十一回ホームカミングデー」が十月二十八日、駿河台キャンパスで開催された。校友やその家族ら約四千六百人が集い、懐かしい旧友や恩師との再会、学生との交流など、晴れやかな秋の一日を満喫した。

アカデミーホールで挙行された開会式は、フリーアナウンサーの吉澤美菜氏(二〇一一年政経卒)の司会で進行。熊澤喜章運営委員長(商学部教授)による開式の辞に続き、主宰者の柳谷孝理理事長は、歓迎の意を示すとともに来春オープン予定の「明治大学グローバル・ヴィレッジ」や和泉キャンパスの新教育棟整備計画など、二〇二一年に迎える創立一四〇周年を見据えた取り組みの一端を紹介。「アジアのトップユニバーシティを目指し、未来に輝き続けていくためには一層の教育・研究環境の充実が必要。引き続きのご支援・ご協力をお願いしたい」とあいさつした。

続いて登壇した土屋恵一郎学長は、時代とともに変化する明治大学に触れながら、国際化の重要性を訴え、「アジアの中で着実に歩みを進めている。明治大学がますます発展していくためにはさらに校友と一体となることが大切だ」と訴えた。来賓としてあいさつに立った校友会の向殿政男会長は「誇りある母校を持つことは幸せ。各地域で校友会に参加し母校を支援してほしい」と呼びかけた。

その後、卒業後六十・五十・四十・三十・二十・十年にあたる特別招待校友をそれぞれ代表し、▽川越菓匠くらくらづくり本舗会長で、元厚生労働副大臣の中野清氏(一九五八年政経卒)▽元(株)京王プラザホテル代表取締役社

長の鈴木絃一氏(一九六八年商卒)▽タレントの渡辺正行氏(一九七八年経営卒)▽富山県立山町長の舟橋貴之氏(一九八八年商卒)▽ミュージシャンの井出慎二氏(一九九八年法卒)▽女優のハマカワフミエ氏(二〇〇八年文卒)の六氏が、学生時代の思い出や現在の仕事、母校への思いなどを語った。最後は、参加者全員で肩を組み、校歌を三番まで高らかに斉唱。盛況の中で開会式は終了した。

●「和泉キャンパス新教育棟(仮称)整備計画」が始動

校友の建築家・中村拓志氏が設計に参画

和泉キャンパスにおける教室数の不足や教育施設の老朽化、さらには社会の激しい変化に対応し、総合的な基盤である「教養教育」を展開する「場」の創出に向け、「和泉キャンパス新教育棟(仮称)整備計画」がこのたび始動した。

八月に和泉キャンパス新教育棟(仮称)整備計画設計プロポーザル(技術提案書選定方式)を実施し、その後の審査委員会で、(株)松田平田設計を最優秀者に選定。九月十二日開催の理事会を経て、二十五日開催の評議員会で正式に決定した。

本整備計画は、明治大学建築学科の創始者でもある建築家の堀口捨己氏設計による第二校舎および第三校舎の老朽化とバリアフ

リーの問題による建て替えが大きな課題。今回の提案では、(1)第二校舎の堀口捨己氏設計の精神と外観の継承を図り、その思想を先進的教育環境として発展させ新たな「学びの場」を生み出した点、(2)学生の学修や居住環境を考慮し、グループボックスなどの新しい教育空間を積極的に取り入れ、学生を主体とした点、(3)キャンパス内の調和や透明感のある外観により、新しい校舎内での学生の活動を可視化することで、シンボル性を表現した点などが高く評価された。

選定された(株)松田平田設計は、二〇一一年度に和泉図書館の建設に携わるなど、実績がある。今回は、本学OBを中核とした設計チームを編成し、さらに堀口捨己イズムの継承に向けて、日本建築家協会賞はじめ各著名賞を受賞している新進気鋭の建築家・中村拓志氏（一九九九年理工学研究科博士前期課程修了）が協力者として参画する。今後は、さまざまな学内部署との協議を経て、具体的な建物デザインを決定していく予定。

● 関西大学と共催・公開シンポジウム

「留学生に未来を託して」

「NEOリーダー育成へ挑む大学」

明治大学は関西大学と共同で、公開シンポジウム「留学生に未来を託して」NEOリーダー育成へ挑む大学」（後援：文部科

学省）を十月二十二日、駿河台キャンパス・リバティホールで開催した。土屋恵一郎学長、関西大学の芝井敬司学長をはじめ、タレントの関根麻里さん、コディネーターとして文部科学省「トビタテ！留学JAPAN」プロジェクトディレクターの船橋力さんが登壇した。

NHK Eテレの番組企画として催されたこのシンポジウムでは、海外留学を目指す学生を増やすための両校のさまざまな取り組みについて、両学長が映像を交えて紹介。さらに、会場と関西大学を中継で結び、同大学生も登壇者と質疑応答を行った。

関西大学の芝井学長は「留学には人生を変える可能性があり、それは自分の生き方に責任を持つことにつながる」と力説。自身も留学体験者である関根さんは、土屋学長の「不安は成長のチャンス」という発言について言及し、「不安をポジティブにとらえるということに気がつきがあった。ぜひ、その精神で留学に挑戦して」と、両校の学生にエールを送った。

最後に、土屋学長は「世界は君たち自身よりも豊かで多様性に溢れている。異なるものとの出会いに飛び込んでほしいし、大学はそれを後押しする努力をたくさんしている」と語りかけ、船橋さんは「この先の二十年間、グローバル化はそれまでの十倍の速さで

進む。留学という異文化体験を通じて、他人に委ねず自分で切り拓く力を身に付けて」と結んだ。

このシンポジウムの様子はNHK Eテレ「TVシンポジウム」で二〇一九年三月十六日（土）十四時から放送される予定。

● 第四次安倍改造内閣

校友二氏が入閣

▽復興大臣、福島原発事故再生総括担当

渡辺博道氏（一九七六年法学研究科修士課程修了・六十八歳・自民党）

▽東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会担当

櫻田義孝氏（一九七四年商学部卒業・六十八歳・自民党）

● 国家公務員総合職試験

合格者十九人に報奨金を授与

国家試験指導センター行政研究所（所長：西川伸一政治経済学部教授）は十月二十四日、二〇一八年度国家公務員総合職試験に最終合格した三十九人のうち、同研究所所属学生または講座受講生十九人への報奨金授与式を、駿河台キャンパス・リバティタワー二十三階の岸本辰雄ホールで執り行った。

式典の冒頭、あいさつに立った西川所長は、努力を惜しまず栄冠を勝ち取った合格者

を称えた上で「この成功体験は今後の人生の糧となる。自信をもって自分が選んだ道歩んで」と激励した。続いて土屋恵一郎学長は「公のために仕事をすることで大切なことは『インテグリティ（＝誠実さ、高潔さ）』。そのことを胸に社会のために働く存在として真つ直ぐ進んでほしい」と、今後の活躍に期待を込めた。

合格者を代表して謝辞を述べた渋谷沙都さん（経営4、財務省内定）は行政研究所をはじめ関係者への感謝を述べた上で、少子高齢化をはじめ山積する我が国の課題に対し「正解がない中でも、『この国を少しでもよくしたい』という熱意を忘れず、挑戦し続ける行政官になりたい」と力強く決意を述べた。

●司法試験合格祝賀会を開催

二〇一八年司法試験の合格祝賀会が十月十七日、駿河台キャンパス・リバティタワー二十三階の岸本辰雄ホールで開催された。柳谷孝理事長をはじめ法人役員、大学役職者、指導教員など関係者が多数出席し、合格者を祝福した。

祝賀会は柳谷理事長によるあいさつで開会。柳谷理事長は、合格者の努力と関係者の尽力に敬意を表すとともに「AIの発達によりこれからの法曹界では新しい知識が求められる。時代の流れを先取りして、明治らしく

『前へ』と激励した。続いて、村上一博法学部長、吉村孝司専門職大学院長ら関係者が祝辞に立った。

さらに、合格者を代表して梅原嘉成さん（既修者コース）、谷道一貴さん（未修者コース）の二人が登壇。法学部から法科大学院に進学した梅原さんは「通いなれた環境で集中して勉強できたことが早期合格につながった」と関係者への感謝を述べた。谷道さんは「ジェンダー教育なども盛んで、人権問題について強く意識するようになった」と在学中の学びを振り返り「社会的正義を実現できる法曹になることが夢」と力強く語った。

今年の明治大学法科大学院からの合格者は二十五人、また、上記以外に明大の学部出身合格者は二十六人となっている。

●来まつし見まつし寄るまつし

第五十四回「全国校友石川大会」を開催

明治大学校友会は九月三十日、「明治はひとつ 来まつし 見まつし 寄るまつし 第五十四回全国校友石川大会」を石川県立音楽堂ホテル日航金沢を会場に開催した。台風二十四号が接近する中、日本全国、大韓民国支部から約千人の校友が参集した。

記念式典は、石川テレビ放送アナウンサーの伊藤雅雄氏（一九七六年政経卒）、北陸朝日放送アナウンサーの上野雅美氏（二〇〇六

年政経卒）の二人が司会を務めた。冒頭、大会旗入場、国歌および校歌の斉唱、物故校友への黙とうに続き、中村曉大会実行委員長（校友会石川県支部）が声高らかに開会宣言した。歓迎のあいさつに立った校友会石川県支部の安井克郎支部長は、「伝統文化や豊かな自然など魅力あふれる石川をぜひ楽しんでいただきたい」と歓迎の意を表した。

大会会長の向殿政男校友会長は、関係者への謝意を示した上で、「明治はひとつ」のスローガンを改めて紹介。「明治大学の名の下に、年齢を越え、地域を越え、職業を越えて集い、仲間とともに母校そして後輩のために支援をすることができるとは、我々の誇りだ」と、さらなる結束を呼びかけた。祝辞では、柳谷孝理事長が登壇し、石川県ゆかりの本学の創設期を支えた杉村虎一に触れながら、「明治法律学校設立ノ趣旨」に謳われる「同心協力」の言葉を紹介し、「同心協力の思いを新たに校友の輪を広げていただきたい」とあいさつ。続いて土屋恵一郎学長は、総合数理学部の新設や文学部哲学専攻の開設、教養系新学部構想など、新しいことに挑戦し続ける明治大学の姿勢を強調し、「アジアのトップスクールとして歩むためには、校友との連携は不可欠だ」と訴えた。

来賓の谷本正憲石川県知事（中西吉明副知事代読）、山野之義金沢市長、今村健連合

父母会長からの祝辞の後、全国の校友会支部長を代表して千葉県東部支部の小関道生支部長が登壇。来年十月六日に幕張メッセで開催される、「第五十五回全国校友千葉大会」をPRした。最後は、明治大学ならびに校友会の発展を祈念して万歳三唱。石川県支部の武部興和副支部長が閉会のあいさつを行い、記念式典は幕を閉じた。

休憩を挟んで行われた記念講演では、「まちづくり都市 金沢」と題して金沢市前市長の山出保氏が講師を務めた。山出氏は、歴史と文化を大切にしながら、新しいことに挑戦した事例を示しながら五期二十年のまちづくりや市政運営を紹介し、「金沢の魅力は歴史、文化の多様性。金沢らしさとは親しみ、癒し、こだわり、思いやり。今後も市民とともに共有していきたい」と締めくくった。

●過去最高のステージとの声も

第十二回お茶の水JAZZ祭を挙

十月七日、アカデミーホールを会場に第十二回お茶の水JAZZ祭が開催された。冒頭では総合司会の宇崎童氏と阿木耀子氏から「母校明治大学および千代田区地域団体の皆さまのご後援、関係者の皆さまによるご協賛など多数のご支援により、十二回目を迎えることができ、心より感謝申し上げます」と謝辞が述べられた。

第一部では世界でその名が知られる気鋭のフラメンコギタリスト徳永兄弟が六人編成で出演。宇崎氏、阿木氏が作詞作曲のヒットナンバーも披露し、本場スペインでも絶賛された演奏技術が大いに会場を沸かせた。

第二部では、日本では珍しいブギウギ・ピアニストとして活躍する斎藤圭士氏が登場。普段のクラシック演奏とは雰囲気が一変する超絶な技巧あふれる演奏に、「指が二十本あるのではないか。初めてブギウギを知ったが感動した」と会場から声が上がっていた。続く第三部では、日本が誇る老舗のビッグバンドであるアロージャズオーケストラが大阪から駆け付け、スタンダードナンバーをはじめとして熟練の腕前を披露。斎藤圭士氏との即興セッションに観客も酔いしれていた。

そして恒例のグラントフィナーレでは、その日限りのスペシャルセッションが実現し「スペイン」を演奏。会場の盛り上がりは最高潮に達した。なお、当日の運営は「音楽を通じた町おこし」をコンセプトに宇崎氏を道場主として千代田区で活動する明大町づくり道場の学生約四十人が担い、本学学生のホスピタリティとその動きに来場者をはじめ出演者からも大きな賛辞が寄せられた。音楽を通じた千代田区地域連携活動の柱として、すっかり地域に定着したお茶の水JAZZ祭は、来年十月の第十三回開催に向け、新たなス

タートを切った。

●日出学園(千葉県市川市)と協定を締結

明治大学はこのほど、日出学園高等学校(千葉県市川市)と高大連携事業に関する協定を締結した。協定期間は二〇二〇年三月末まで。同校とは、二〇一五年度にも協定を締結(一年間)し、さまざまな高大連携事業を実施した。その実績を踏まえ、このたびの再締結となった。

この協定は、相互の連携を通じて、同校の生徒が大学の教育・研究に触れる機会を提供することで、両校の相互理解を深めることが目的。具体的な事業内容として、大学による教育プログラムの実施(出張講義等)、大学キャンパス見学会の実施、教育にかかわる意見交換会などが想定されている。あわせて両法人間では、「連携推進協議会」を設置し、相互の交流・発展を図るため、双方で行う連携・協力事業に関して協議を進めていくこととなった。

十月十一日には、学校法人日出学園の青木貞雄理事長、堀越克茂中学校・高等学校長、児玉尚樹法人企画室長が駿河台キャンパスに来訪し、柳谷孝理理事長、土屋恵一郎学長、飯田和人経営企画担当常勤理事ら本学関係者と対談。和やかな雰囲気の中で双方の学校紹介や今後の連携に向けた意見・情報交換

などを行った。

※学校法人日出学園（千葉県市川市）

幼稚園・小学校・中学校・高等学校を擁する私立の共学校。校訓は『誠・明・和』。中学校・高等学校では、英語と数学で習熟度別少人数クラスを採用するなど、きめ細かい教育を展開している。

●福島県飯館村と農学部・農場が

震災復興に関する連携協定を締結

明治大学農学部および農場と福島県飯館村は九月十七日、「飯館村と明治大学農学部および農場との震災復興に関する協定書」を締結。同日、飯館村役場で菅野典雄村長と針谷敏夫農学部長が協定書に調印した。

本協定は、それぞれが有する知見、技術、情報、資源等を有機的に活用して、地域復興に関わる諸課題の解決や施策の実施について協働するとともに、社会で活躍する創造的な人材の育成、さらなる相互の交流と連携・協力の推進を図ることを目的とするもの。

これまで農学部と黒川農場は、「ふくしま再生の会」の活動を通じて飯館村内にハウス温室を建設し、ZeRo・agri（養液土耕栽培自動制御システム）を使って二〇一五年からピーマン、レタス、ホウレンソウを栽培。施設栽培に慣れない農家でも省力的に安定した高収量が得られることが評判になり、

帰村後の農業振興の一助として導入が期待されている。二〇一六年度からは、ZeRo・agri使用による土壌養水分の変化、作物収量への影響、カリ施用による放射性セシウムの吸収低減効果等の実証研究を行っている。今後は協定期間の三年間に「食」をテーマとした「人財交流」と「農あるくらしの再生」を目的として、さまざまな具体的事業を計画していく。

●国際日本学部・佐藤郁ゼミ

キリンビールと連携し

「魅力あるビアガーデンづくり」を提案

国際日本学部・佐藤郁ゼミ（観光学）は、中野キャンパスに隣接するキリンビール（株）と連携し、日本人と訪日観光客の交流を目的としたイベント「GUEST BEER GARDEN」浴衣で交流ナイト」を八月二十二日、中野セントラルパークで開催した。

これは、中野セントラルパークで毎年実施されている「ビアパーク×キリン一番搾り」の認知拡大、にぎわい創出のため、キリンビールから企画提案依頼を受けた佐藤ゼミの学生（二十歳以上）が、四つのグループに分かれてアイデアを出し、事前のプレゼンテーション大会を経て決定したもの。

今回のイベントでは、中野を訪れる訪日観光客は増えているにも関わらず、セントラ

ルパーク周辺は未だ認知度が低く利用者が少ない一方で、ゲストハウス宿泊者のイベント参加率の高さ、交流需要の大きさに注目を。ビアガーデンを「日本らしい、季節を感じながら交流を楽しむ場所」としてPRし、ビアガーデン訪問へのきっかけを創出する1日交流イベントとして企画された。また、ビールが苦手な女子学生向けのスイーツカクテルの考案など若者目線の提案が取り入れられ、外国人ゲストのほかゲストハウスのスタッフ、中野区観光大使や地域住民ら総勢四十人以上が集まり、あちこちで英語での会話が飛び交うにぎやかな雰囲気の中、盛大な交流イベントとなった。

佐藤ゼミでは、ツーリズムを国や地域における文化の違いを超えて、交流・相互理解を推進するツールとして、またツーリズムを通じて世界に日本の魅力を発信し、「世界の日本の日本」について考察することをテーマに研究活動をしていく。

●経営学部公開講座

「無印良品の思想と事業展開」

経営学部は九月二十一日、(株)良品計画代表取締役社長の松崎暁氏を講師に招き、公開講座「無印良品の思想と事業展開」を駿河台キャンパス・リバーサイドで開催した。

一九八〇年に(株)西友のプライベートブランドとして四十品目でスタートした「無印良品」は現在、日本国内はもちろん世界二十八の国・地域で事業を展開している。松崎氏は、海外事業部での実績が認められ二〇一五年に代表取締役社長に就任。以来、グローバル化を加速させている。

講演では、「無印良品」の誕生から生活者の視点に立ち本質的な機能を重視した商品企画、企業理念やブランド展開などについて松崎氏が解説。「無印良品は生活者の自由を確保する商品。創業以来、媚びず、驕らず、でしゃばらず、を大事にしている」と骨格となる思想の一端を紹介した。

さらに、ロンドン、香港をはじめ、商標の不正登録問題を乗り越えてたどり着いた中国進出など、売上の四割を占めるまでになった海外展開の具体例を示しながら、グローバル人事制度などにも言及。「『良心とクリエイティブ』を実践する風土と仕組みをグローバルに発展させる」と中期経営計画の基本方針を明かし、さらなるグローバル化への姿勢を強調した。

会場には、学生をはじめ一般聴衆など約百六十人が来場。質疑応答では熱心な質問が飛び交うなど、グローバル企業トップの話が間近で聞ける貴重な機会となった。

●情報コミュニケーション学部

「国際交流」特別公開イベントを開催

情報コミュニケーション学部は十月八日、世界各国の大学・研究機関から新進気鋭の研究者を短期に集中的に招請し、一つの授業科目とする「国際交流（世界のキャンパスから）」の一環として、台湾の国史館館長・呉密察氏を招いた特別公開イベントを駿河台キャンパス・リバティホールで実施した。

第一部では、コーデイナーの大黒岳彦教授からの当イベントの趣旨説明および講演者である呉密察氏の紹介があった後、コメントーターの三澤真美恵氏（日本大学文理学部教授）が「太陽花學運」に至る台湾史について説明し、続いて、呉氏のインタビュ形式の基調講演が行われた。呉氏は自身の日本への留学体験を踏まえながら、学問と政治的な実践とのつながりについて、また、日本と台湾とが置かれている政治状況の違いについて、学生に分かりやすく解説した。

第二部は、情報コミュニケーション学部の須田努教授と清原聖子准教授も登壇し、トークセッションが行われた。須田教授からは学問をする際の自らの立場や視点に自覚的であることについての問題提起がなされ、清原准教授からはアメリカにおける社会運動にも触れながら、政治とメディアとの関係に関する話題が提供された。これらのテーマにつ

いてコメントーターの三澤氏や学生も交えた活発なやりとりがなされた。

当日は、教員・学生・一般来場者を含めて約百八十人の参加者があり、盛況な特別公開イベントとなった。

●大学生観光まちづくりコンテスト二〇一八

経営・歌代ゼミが観光庁長官賞

政経・木寺ゼミが優秀賞を受賞

大学生観光まちづくりコンテスト運営協議会（事務局・(株)JTB総合研究所、(株)三菱総合研究所）が主催し、観光庁、文部科学省等が後援する「大学生観光まちづくりコンテスト二〇一八」で、経営学部の歌代豊ゼミ、政治経済学部の木寺元ゼミから出場した計四チームが観光庁長官賞、優秀賞等を受賞した。同コンテストは、説明会・基礎講座、現地フィールド調査・分析に基づき、大学生チームが観光まちづくりプランを競い合うコンテスト。八回目となる今回は、茨城、北陸、多摩川、長崎国境離島の各地区ステージに分かれて実施された。

茨城ステージ本選は九月五日、茨城県庁講堂において開催され、予備審査を通過した十チームが観光まちづくりプランを発表。その結果、歌代ゼミTEAM茨城が『きょう、いきる力をくろ小で！〜廃校と野外教育で大きな子を育む町構想〜』を提案し、いばらき

観光マイスター賞を受賞した。

九月十一日には、金沢市アートホールで北陸ステージ本選が開催された。予備審査を通過した十チームが発表を行い、歌代ゼミ北陸支部が『北陸 みつめ旅』でかけよう水と心の北陸へ』で、観光庁長官賞（最優秀賞）を受賞した。

九月十四日に、さいたま新都心合同庁舎講堂で開催された多摩川ステージ本選では、予備審査を通過した十チームが発表した。木寺ゼミが『FUSSA GO!!』福生に恋さ〜』で第二位優秀賞とオーディエンス賞を、歌代ゼミおでん班が『たまスポ スポーツの力で人々が集うかわまちづくり』で第三位優秀賞とかわまちづくり賞を受賞した。

●リバティアカデミー

「長崎潜伏キリシタンの信仰世界」を開催

明治大学の生涯学習機関・リバティアカデミーは十月二十七日、オープン講座「長崎潜伏キリシタンの信仰世界―伝来したテキスト（教理書）を読み解く―」（共催・杉並区教育委員会）を和泉キャンパス・メディア棟で開催。講師は、近世日本史を専門とする文学部・清水有子専任講師が務めた。

禁教時代において、既存の社会・宗教と共生しつつ、密かに信仰を継続した潜伏キリシタンを物語る稀有な物証として、本年世界

遺産（文化遺産）に登録された「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」。本講座では最近の研究成果と歴史史料の検討を踏まえながら、潜伏キリシタンがどのような存在であったかという問題に迫る内容となった。

清水講師は、まず潜伏キリシタンの定義やかくれキリシタンの系統、潜伏信仰をめぐる論争などについて説明し、続いて当時伝来した三つの教理書『こんちりさんのりやく』『ルソンのオラシヨ』『天地始之事』を読み解きながら禁教下の信徒の信仰活動について解説した。また、浦上潜伏キリシタンのその後に関する資料を示し、まとめとして長崎に伝来した教理書が、潜伏信徒の間にカトリック共同体の一構成員であるとの自己意識を継続させキリスト教解禁へ影響を及ぼした歴史的意義を指摘した。

会場は多くの人で埋め尽くされ、熱心に耳を傾ける姿が多数見受けられた。世界遺産としての注目度はもちろん、「潜伏キリシタン」の歴史的意義への興味・関心の高さをうかがわせる講座となった。

●「創立者のふるさと活動隊」

活動報告会を開催

明治大学創立者三人の出身地（鳥取県・鳥取市、山形県天童市、福井県鯖江市）で実施した学生派遣プログラム「ふるさと活動隊」

の活動報告会が十月二十八日、駿河台キャンパス・リバティタワーで行われた。参加した学生たちは、プログラムの成果や課題などをまとめ、三地域の自治体関係者らを前に発表。実践的な学びを通じ、地域活性化に貢献するためのさまざまなプランを提案した。

鳥取チームは「鳥取（県・市）の魅力発信と交流拡大、岸本辰雄の認知度向上への取り組み」について報告。行ってみたいとわからない鳥取の魅力や再訪したくなる理由についてのもめや、地元ではあまり知られていない創立者・岸本辰雄の認知度向上のため、鳥取市立中央図書館に岸本の功績を発信するパネルを展示した。

天童チームは「首都圏の学生が考える天童市活性化への提言」として将棋にスポットを当て、国道沿いの道の駅にその場で天童の将棋文化に触れられる取り組みを行うことの提案や、天童市を舞台にした将棋アニメやマンガに登場した場所のマップづくり、アニメキャラクターを利用した地域活性化政策について提案した。

鯖江チームは「鯖江市のブランド力向上への提言」をテーマに、若者が地域から流出している同市の課題の対策として、旅行要素を併せ持ち複数の地元企業で就業体験ができるインターンシッププランの提案や、若者のUターンを促進するPR戦略などの取り組み

について紹介した。

●水泳部

第九十四回日本学生選手権

男子総合優勝 四連覇を達成

体育会水泳部は九月七日～九日、第九十四回日本学生選手権水泳競技大会（神奈川県・横浜国際プール）に出場し、男子が通算六度目となる総合優勝。史上四校目となるインカレ四連覇を達成した。

明大は二日目を二位で終えたものの、最終日に行われた男子100メートル自由形で松元克央選手（政経4）が一位、溝畑樹蘭選手（政経2）が二位と上位を独占。また、最終種目の男子4×200メートルフリーリレーでも吉田冬優選手（政経3）・内田航選手（法4）・溝畑選手・松元選手のチームが圧勝するなど実力を発揮し、逆転での総合優勝を果たした。

●端艇部

全日本大学選手権二種目で優勝

体育会端艇部が九月六日～九日、戸田ボートコース（埼玉県戸田市）で開催されたボート競技の第四十五回全日本大学選手権大会に出場し、「男子舵手なしフォア」と「女子ダブルスカル」の二種目で優勝した。

「男子舵手なしフォア」は、佐々木心選手（商2）、佐藤雅也選手（経営2）、菊池渉太

選手（政経4）、蓮沼隆世選手（法3）の四人が出場。九日に行われた決勝ではスタートから積極的なレース展開で、二位に3秒差をつけて優勝を果たした。

「女子ダブルスカル」は、八月の第十八回アジア競技大会（インドネシア）に日本代表として出場した瀧本日向子選手（商4）と高島美晴選手（政経3）のペアが参戦。決勝レースでもリードを許さず一位でゴールし、その実力を見せつけた。

●サッカー部

「総理大臣杯」二年ぶり二度目の優勝

体育会サッカー部は、第四十二回総理大臣杯全日本大学サッカートーナメント（八月三十一日～九月九日、大阪府・ヤンマースタジアム長居、キンチョウスタジアムほか）に出場し、二年ぶり二度目の優勝を果たした。

地域別の予選を勝ち抜いた全国二十四チームが争う同大会で、明大サッカー部は決勝戦に駒を進めた。九月九日の決勝戦の相手は、大阪体育大学。均衡した試合展開の中、前半四十一分に先制点を奪うと、後半三十二分にも追加点を奪って2-0。同大会四年連続決勝進出の力強さをみせた。

●射撃部

二年ぶりの女子インカレ総合制覇

体育会射撃部は、十月十八日～二十一日に埼玉県長瀬射撃場で開催された二〇一八年全日本学生スポーツ射撃選手権大会／第三十一次女子総合に出場し、二年ぶりの女子総合優勝を果たした。

本大会の団体戦は、10メートルエアライフル立射60発競技（AR）と50メートルライフル三姿勢120発競技（SB）の二種目の順位獲得ポイントで争われた。女子総合では、副将の劉炫慈選手（商4）、高橋佳伶選手（国際日本2）がチームを牽引。その結果、AR、SBともに一位を獲得し、二年ぶりのインカレ制覇を成し遂げた。なお、男子総合は、惜しくも四位だった。

●競走部

箱根駅伝出場決める

二〇一九年一月二日～三日に開催される第九十五回東京箱根間往復大学駅伝競走（箱根駅伝）への出場校を決める予選会（東京都・陸上自衛隊立川駐屯地～立川市街地～国営昭和記念公園）が十月十三日、十一校の出場枠をかけて行われ、体育会競走部は五位で箱根駅伝本戦への出場権を獲得した。

山本佑樹駅伝監督は、「選手が一年間頑張ってくれた。本戦では上位争いをしてシード権を獲得し、たくさんさんの声援に結果で恩返ししたい」と意気込みをみせた。

●プロ野球ドラフト会議

渡邊佳明選手に楽天イーグルスから指名

プロ野球十二球団が来季の新人選手の獲得に臨むプロ野球ドラフト会議が十月二十五日、東京都内で行われ、体育会硬式野球部の渡邊佳明選手（政経4）が東北楽天ゴールデンイーグルスから六位指名を受けた。

指名を受けた渡邊選手は、硬式野球部合宿所（東京・府中市）で井上崇通部長（商学部教授）、善波達也監督と記者会見に臨み、「まずは開幕一軍を目指し、毎日が修行だと思つてレベルの高い世界で日々成長できるようにしたい」とプロ入り後の抱負を述べた。

また、同球団の監督や取締役副会長を務め今年一月に亡くなった星野仙一氏（一九六九年政経学部卒）への思いを問われると、「星野さんの明治魂を受け継いで、熱い気持ちを前面に出してプレーしていきたい」と宣言。プロの世界で勝負する意気込みを語った。

なお、硬式野球部OBでは、吉田大成選手（明治安田生命・二〇一七年国際日本学部卒）が東京ヤクルトスワローズから八位指名を受けている。

◆駿台トピックス

●秋の親睦バス旅行を催行

十月二十七日、会員の親睦の一環として総務・事業委員会が企画運営した「名瀑鑑賞と



江戸時代創建の足利学校のシンボル「学校門」前にて

足利の史跡を訪ねる」バスツアーが行われ、二十一名が参加、和気藹々とした雰囲気の中で京を出発し、一路北関東に向かいました。

予定を変更し、最初の訪問先となった足利学校は、十六世紀中頃にフランシスコ・ザビエルにより、日本国中最も大にして、最も有名な坂東の大学として西洋にも紹介され、現在は国指定の史跡になっています。隣接する饒阿寺（ばんなじ）は足利氏の居宅跡で、本堂は鎌倉時代の禅宗様建築で、平成二十五年八月に国宝に指定されています。地元ボランティアガイドの説明には、皆さん熱心に耳を傾けていらつしゃいました。

昼食会場は昭和三年創業、夢二や文士たちも訪れた歴史と格式を兼ね備える名店「料亭 三翠楼 松し満」にて。四季の食材を取り入れた会席料理と地元の銘酒などを堪能しながら、会員同士の話も弾んだようです。

その後、群馬県沼田市にある名瀑・吹割の滝を散策、東洋のナイアガラと謳われる豪快な滝の流水と渓谷美を楽しみました。

帰り道では、ワインを片手にカラオケ大会で盛り上がるなか、あつという間に帰京、とても充実した楽しい一日となりました。

●初の試みとして、ラグビー明慶戦を観戦

十一月四日、関東春季大学で常勝帝京大学を破つて勢いに乗るラグビー部の対慶應戦を会員三十四名で観戦、これは当会として初めての試みとなります。

試合は残念ながら、後半三十六分に逆転され28-24で惜敗しましたが、試合終了後はラグビー部OBの方が経営される「モンキー」にて残念(?)懇親会を開催。山口大介さん(ラグビー部OB)の「ラグビーではどこにチームの状態のピークを持つてくるか?」がポイントとなり、明治は日本選手権に合わせた話なので、これから……、という話に安堵はしたものの、勝利の美酒とはならず、やや残念な思いも残りました。今後の帝京戦、早稲田戦に大いに期待したいところです。

◆六十五周年記念例会出席者

○会員出席者

青木幹則、青柳勝榮、秋山隆敬、坪昭二、浅井宏、安達明正、阿部倫明、同ご友人、有賀隆治、飯田和人、飯塚佳央、池田一義、池田勝也、石川かおり、石川均、石橋良一、石原道勝、伊東正博、同ご友人、井上欽也(代理)、伊原敏雄、岩田守弘、上西紘治、宇川一夫、潮田伊佐夫、宇敷和章、同ご友人、内川雄一郎、浦川竜也、江崎徹、同ご友人、大石哲也、大竹夏夫、大野正美、大原幸男、大前実之、大村託現、岡田茂、尾暮敏範、鬼塚和也、小山哲郎、加賀美猛(代理)、金井健、狩野省市、栢森靖、菊部彰夫、河合陽一郎、川原均、河村博、神林光、木下唯志、木村健一、清野明男、草木頼幸、小島清治、同ご友人、兒玉康智、同ご友人、小濱雅悦、小林一光、五味道雄、小山修、小山有彦、根田哲雄、根田吉雄、斉藤弘之、齋藤柳光、同ご友人、三枝富博、坂田英夫、坂田正弘、坂本孝行、笹田学、佐藤和正、佐藤健、佐藤仁、佐野公哉、佐野径、澤野太嘉嗣、志田憲彦、上口裕司、杉浦伸二、同令夫人、鈴木章浩、鈴木紘一、鈴木隆志、同ご友人、関孝夫、同令夫人、関根宏一、相臺志浩、園部洋士、高木明裕、高澤徹、高橋郁夫、武田宣夫、田口幸隆、同ご友人、田代恭一(代理)、田中孝明、

谷原誠、田村駿、田村健、同ご友人、辻井知明、角田裕一、当山明彦、徳丸平太郎、富水流孝二、長岡信裕、中川敏洋、中里猛志、長堀守弘、中村豊、長吉泉、西澤豊、西山武夫、二宮充子、野口昌宏、長谷川進一、同令夫人、畠中君代、幡谷公朗、同令嬢、塙英幸、同ご友人、羽生健一郎、馬場範夫、林威樹、原田榮、日高憲三、平川清、同ご友人、平田静子、廣渡眞(代理)、深代尚夫、同ご友人、福田和彦、藤代耕一、藤巻伴英、前川一郎、眞壁八郎、榎野泰、同ご友人、松崎優子、松本伸一郎、摩尼和夫、三浦栄治、宮下隆、向井眞一、向殿政男、村岡健、村田嘉一、室井恵明、山上雅隆、山口大介、山口政廣、山田憲典、山田朝彦、同令夫人、山田勝、弓野理恵、義江邦夫、吉田光一郎、若林紀生、渡邊和男、渡邊一治、渡邊健三、渡邊洋三、綿引宏行

○入会前招待出席者

佐々木修二、高見克司、中村康一、宮入知喜、山端康幸

○明治大学ご招待者

柳谷孝、土屋恵一郎、中村義幸、鈴木利大、大田原健司、荒川利治、林義勝、田部井茂、平井克彦、清水秀夫、村上一博、出見世信之、荒川薫、安藏伸治 (敬称略)

【編集後記】

今年の夏から秋にかけては、異常気象による記録的な災害の多い年でした。西日本を中心に豪雨や大型台風による水害が多発し、十月に入っても真夏日を記録する猛暑となりました。

気象庁の発表では一九四六年の統計開始以降で最も高い平均気温を記録し、埼玉原熊谷市では国内史上最高の四十一・一度(七月二十三日)を観測しました。消防庁によると酷暑による熱中症で救急搬送された人が九万五千人で最多、また、各地で土砂災害や河川の氾濫が相次ぎ甚大な被害となりました。そして、七月に発生した台風十二号は東から西へ向かう異例のコースを辿るなど、前代未聞の現象と注目を集めました。「観測史上……、記録的な……」とテレビや紙面では頻繁に報道され、被災地の様子を映していました。

そんな時、私は子供たちが所属しているボーイスカウトのモットーである「備えよ常に」という言葉が頭に浮かび調べてみました。これは「いつ何時、いかなる場所で、いかなる事が起こった場合でも善処ができるように、常々準備を怠ることのないように」との意味だそうで、備えへの重要性を教えています。

日頃からグループでの野外活動を通じ、自主性、協調性、社会性、リーダーシップを育て、非常時にも役立つ生活のスキルを身につけていくのです。

「まさか自分がこんな目に……」と耳にしますが、いつ何が起こるか分からない時代に「備えよ常に」を日常生活や仕事の中でも実践できる人になりたいと思いました。

(根田吉雄)